〈巻頭言〉

施設老人の食事とＱＯＬ

食べ物に対する好みは，人間の生理機能や風土の影響を受けると同時に，食べ物に関する価値やふるまいとのかかわりあいが強い．

最近の老人ホームのなかには，パンとコーヒーを朝食の常食に加えているところも多いという．自分の椀や箸の持ち込みを制限つきながら許可している施設もあると聞く．ともかくこのごろの老人ホームの給食サービスの充足ぶりには目をみはるものがある．

栄養量の適正供与，給食材料や調理素材の選択，多様な治療食の提供や特別禁忌食への対応など一部の病院給食をしのぐほどに充足しているところもある．咀嚼・嚥下能力に見合った刻み調理形態といった，食べやすさ，与えやすさの充実面はもとより，食器類からテーブル，椅子，食堂デザインにも細かな配慮がみられる．居住者の孤独感や風土・生活文化へのかかわりあいへの配慮もゆきとどいていて，１か月に10日はハレの食べ物を供する日になるとも聞く．

給食の充足はケアの質の向上と密接に関係している．ケアの向上は『ADL から QOL』へといった理念を深めたろうし，『寝食分離』といったケアの手段，『寝たきり防止』というケアの目標を明確にさせた．老人ホームがスローガンとして長い間努力してきたところの『収容施設から生活施設へ』は，今日ようやく結実しつつあるようにもみえる．だが，給食サービスは，これでよいのだろうか．

いま，手もとに施設居住者２人の老人の逐語記録がある．「ここではねェ，発見ができないもの，かわったことがないもの，おいしい食事をいただいて，寝て起きるだけ．もう何もしたくない．１人ではできないもの」，「希望？　ない

ですよ，とにかく死ぬまでこうしているんだから．毎日の食事がおいしければそれでいいんだと思います」，「ここはいいとこです．いいとこったって食べ物がいいですから，私はあきらめました」

問わず語りのなかに話されていることは，食べ物のことでも給食サービスのことでもなく，生きることと老いることのなかに位置している食事のことである．食べることに全く不自由がないどころか，満足しているはずと自他共に認めないわけにはいかない状況を認識していながらも，ふくれあがってくるような虚無感をおさえられないでいるようである．

考えれば，食事ほど消費者としての独自性と自律性を呼び起こすものはないし，このことを繰り返し学習しなければならないものは日常生活のなかにそう多くはない．食品を選ぶこと，買うこと，好みの食べ物に調理すること，食べたい量，食べたい種類のものを加減すること等々．このようなふだんの消費者としての経験と想像力の働きを通して自己実現へのロマンが引き出され，そこから独自性や自律性が派生するのではあるまいか．そうだとすれば老人ホームの老人のなかにみられる，あのような老人の寂寥感の所在は，食べ物は十分でも食事の一部分しか手にすることのできない消費者の不自由さにある．そのように老いている境遇への深い深い悲哀にもよるだろう．

老人ホームの給食サービスの充実は，食べ物の好みやふるまいへの配慮を超えて，消費行動を動機づけ実行できる地域開放型へのプログラムが持続して準備されたときにQOLと結びつくのではあるまいか．

むしろこのような論議よりは，何らかの人手さえあれば，地域にあって消費者として暮らしていける人々が施設に居住することを余儀なくされているような貧しいケアシステムの改革が先なのかもしれない．

中島紀恵子・日本社会事業大学教授